

鹿児島支部・公開シンポジウム「樹木と都市環境」

12月21日、鹿児島支部では、鹿児島中央駅前のよかセンター鹿児島で「樹木と都市環境」をテーマに公開シンポジウムを開催しました。

このシンポ開催の発端は、鹿児島大学内での樹木伐採計画に抗議する運動でした。学内に「稲盛記念館」が竣工されるのに伴い、来訪者駐車場のために、クスノキやイチョウの大木を14本伐採するという計画が浮上しました。教職員組合や学生が反対署名を集め、大学と交渉しました。大学当局は、結局、伐採を断念しました。この「事件」は地元新聞にも大きく掲載されました。

こうした学内外の運動を受けて、地球規模での温暖化とそれにとまなう災害や都市にヒートアイランド現象が問題になっていることから、市民向けに「樹木と都市環境」の問題を考えるシンポをやろうということになりました。

21日のシンポジウムでは、「緑地の消失による都市の砂漠化」（佐藤正典・鹿大理学部）、「まとまりの緑～点から線へ、そして面へ～」(野崎勉・元鹿大工学部)、「ドイツの樹木保護と都市環境」（中島大輔・鹿大法文学部）の3つの報告がなされ、野崎報告では「自然と共生する都市」としてビオトープ（生物生息空間）の創生、街路樹による日陰の形成・保水性舗装による路面温度の低減、積極的植樹と大木化・広域化が提言されました。中島報告では「樹木登記簿」などドイツにおける樹木保護の法制度が紹介されました。

市民も多く約50人の参加者でした。ドイツとの比較で、なぜ市民の意識が違うのか、鹿児島での樹木保護の問題点など、質問・意見も活発に出て、時間をオーバーするほどでした。 （小栗 実）